

御土居跡 [北半]



遺跡見て歩きマップ



発行：京都市考古資料館
共催：西陣歴史の町協議会
後援：京都歴史文化施設クラスター実行委員会



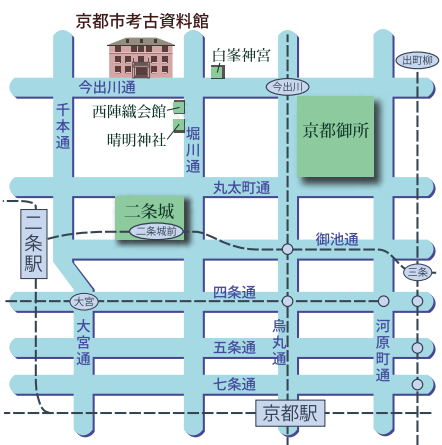
平成31年度 文化庁 地域の博物館を中核としたクラスター形成事業



京都市考古資料館

大正3年に本野精吾の設計で建てられた旧西陣織物館を内部改修し、京都市内の発掘調査・研究の業績を発表・展示するため昭和54年11月に設立されました。特別展と常設展で構成され、約1500点の遺物が展示されています。遺物展示のほかにも、映像やパソコンで旧石器時代から近世にかけての京都の歴史を学ぶことができます。建物は、昭和59年に京都市有形文化財に登録されています。

〒602-8435
京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265-1
TEL. 075-432-3245 FAX. 075-431-3307
http://www.kyoto-arc.or.jp/museum/
入館無料・月曜休館(月曜が祝日の場合は翌日)
開館時間 9:00~17:00(入館は16:30まで)
JR京都駅より地下鉄烏丸線 今出川駅下車徒歩15分
市バス101・102・201・203・59系統 今出川大宮下車すぐ



御土居の概要

本能寺の変の後、いち早く行動をおこした羽柴秀吉は、実質的な天下人となって戦国の世に終止符を打つこととなります。その秀吉は天正13(1585)年に関白職を授かり、天正14年には豊臣姓を賜って太政大臣に就任、政権を樹立します。京都の改造にも手をつけ、同年、聚楽第を造営、周辺に武家屋敷を建設しました。次いで天正17年には内裏の修造を行ない、周辺には公家町を配置、天正18年には寺院を強制的に集めて寺町と寺ノ内を形成するとともに、1町(120m四方)の中央に南北通を設けて短冊形の町割りに改変して土地の有効活用を図りました。

最後の仕上げが天正19年、京都の周囲を取り囲むように造られた御土居でした。この御土居は外敵の襲来に備える防塁としての機能と川の氾濫から街を守る堤防としての機能を有したとされます。北は上賀茂から鷹ヶ峰、西は紙屋川から東寺の西辺、南は東寺南端の九条通、東は鴨川の西側、今の河原町通までの南北約8.5km、東西約3.5km、総延長約22.5kmに及びました。

御土居は土塁と堀からなります。堀を掘削し土を内側に盛り上げて台形状の土塁を築き、上には竹が植わっていたとされます。場所によって違いはありますが、堀は幅約20mで深さは2~3mあり、土塁は基底幅約20m、頂上部幅約5m、高さは4~5mありました。文献から天正19年閏1月に着手して3月には完成したことから、かなりの突貫工事であったことがわかります。

また、御土居築造により洛中と洛外の区別が明確となり、出入口として「京の七口」が取り込まれました。江戸時代には角倉家や京都所司代によって厳重に管理されていましたが、洛中の通りの延長上にある土塁が徐々に切り崩され、洛外へ市街が拡大し、明治以降、土塁の破壊が進行します。大正7~9年には京都府史蹟勝地調査会が現状を調査し、昭和5年には8箇所、昭和40年には1箇所の合計9箇所が国の史跡に指定されて現在に至ります。

4 北区紫野北花ノ坊町 土塁基底部と堀



4 北区紫野北花ノ坊町 土塁を横切る暗渠



4 北区紫野北花ノ坊町 犬走の構築の様子



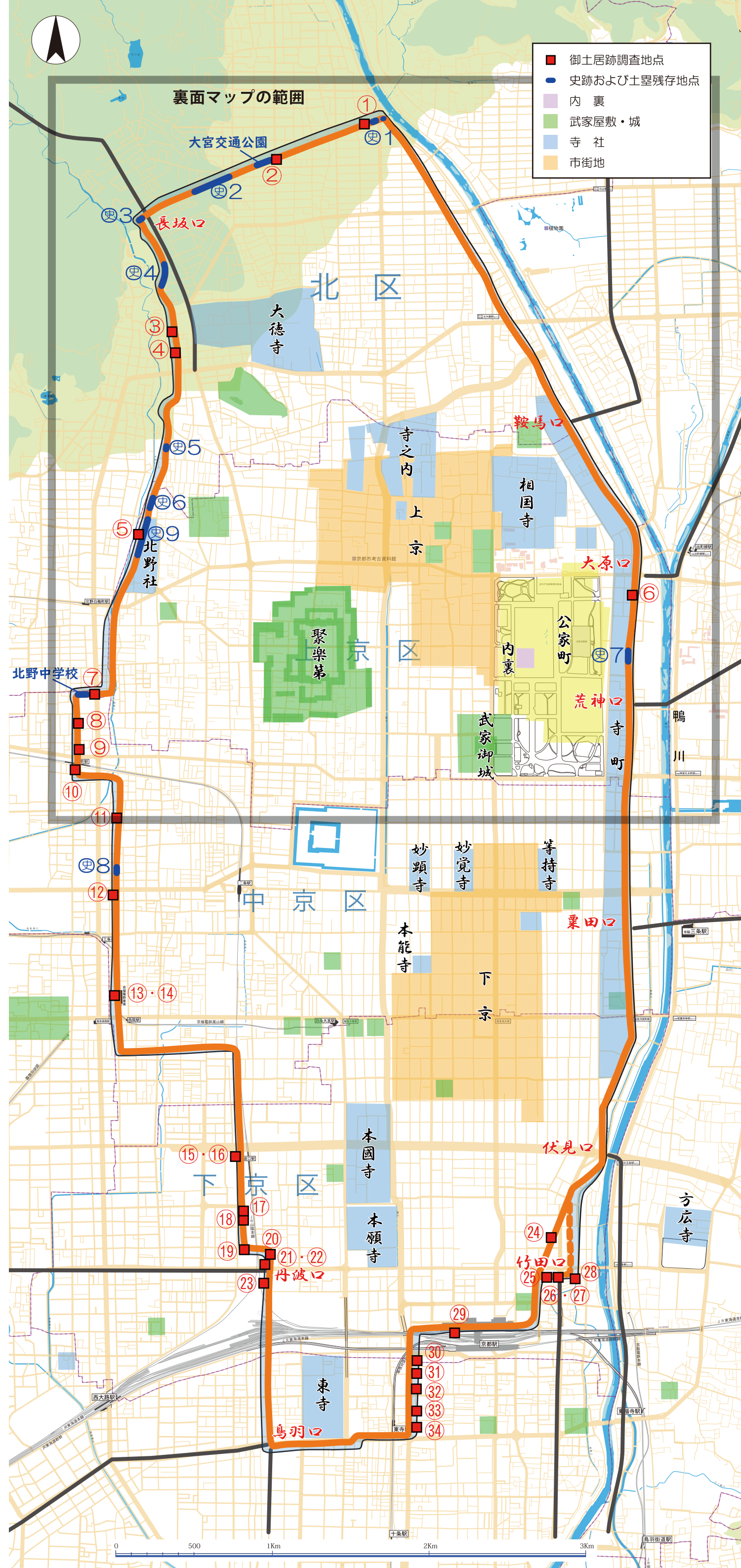
5 上京区馬喰町(北野天満宮境内) 暗渠取水口



5 上京区馬喰町(北野天満宮境内) 石組み暗渠排水口



5 上京区馬喰町(北野天満宮境内) 東西方向の切り通り通路



御土居跡の調査

明治維新後、御土居は無用の長物となり、開発に晒され破壊されていきます。そのような状況を憂えた京都府史蹟勝地調査会によって、大正7~9年(1918~1920)に最初の学術的な調査が行われました。土塁・堀の残存状況が丹念に調べられ、『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊(1920)にその報告が掲載されています。

その後も、京都府社寺課が昭和4年(1929)に文部省へ残存状況の良い8箇所を推挙し、翌年7月に国の史跡となりました。また、北野天満宮境内の北西の御土居跡も昭和40年(1965)に史跡に追加指定され、現在史跡御土居は9箇所となっています。またそれ以外に、北区大宮交通公園内と中京区北野中学校内の2箇所が残存しています。

御土居跡の調査は分布図に示した主として34地点で調査が行われてきました。御土居は、土塁とその外側に堀を伴い、土塁裾部には「犬走」も設けられていました。場所にもよりますが、土塁基底部の幅約20m、高さは4~5m、堀は幅が約20m、深さは2~3mとされます。堀は鴨川沿いの東辺には設けられなかったようです。

土塁 上記史跡9箇所とほか2箇所以外では、ほとんどが削られて残っていません。しかし、発掘調査では、④・⑤・⑧・⑨・⑪・⑬・⑭・⑰・⑳・㉑の各調査で土塁の痕跡が確認されました。調査で見つかる土塁は上部が削られており、確認されたのは盛土、あるいは地山を成形した基底部です。最も良好に残存していた盛土は最大で厚さ約2mありました(調査⑩)。堀と土塁の間には幅2~3mの犬走が設けられていました(調査④・⑪)。盛土は堀を掘った土が盛られます。堀から遠い側に盛土の土手を築き、これを土留めとして堀側へ粘土と砂礫が交互に積まれていました(調査⑬・⑭・⑰)。

御土居の南東辺では、17世紀中頃に造営された涉成園のために、北東から南西方向であった当初の御土居が東・南に付け変えられたと考えられており、調査㉕では変更後の東西方向の土塁の基底部盛土が見つかりました。この箇所では堀は設けられませんでした。

堀 堀が明確に残存しているのは史跡2のみで、史跡3・4・9では「北野社家日記」にあるように紙屋川が「大堀」であるほか、堀はほとんどが埋められています。埋没した堀は、④・⑪・⑫・⑭~⑰・㉑~㉓・㉕~㉗と多くの発掘調査で見つかっています。調査④では、紙屋川段丘を利用して造られた土塁の西側の斜面を深く削り込んだ堀の東肩が見つかりました。調査⑪では幅14m以上、深さ2.5mあり、底部が粗砂礫であったことから、紙屋川が堀内を流れていたと考えられます。堀としては明治末年頃まで残されていたが、大正初年に土塁を崩して埋められたとみられます。一方、調査⑮~⑰、⑳~㉒では堀の底部の堆積が泥土質であることから、滞水環境にあったことがわかります。平成30年度京都市指定文化財となった御土居跡(西九条周辺)出土品は調査㉑~㉒からの一部です。

8 中京区西ノ京円町



資料提供：公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

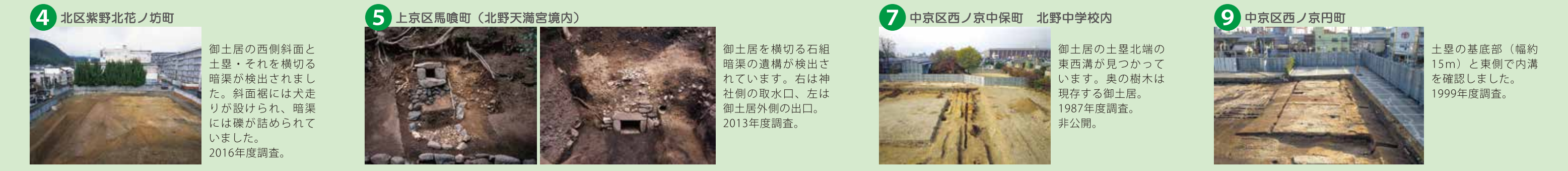
御土居跡 [北半]

—史跡御土居と御土居跡を歩く—

1591年、文禄・慶長の役で朝鮮との戦を始める一年前、豊臣秀吉は大規模な京都改造事業に取り組んでいます。甥の秀次に關白職を譲って聚楽第を明け渡し、2～4ヶ月のスピードで京都の町を囲む22.5kmにおよぶ御土居を構築しました。

その他、寺町、寺の内、本願寺等の寺割りや短冊形の町割り等の事業も行いました。真竹等が植えられたという京都の美観にも貢献した御土居史跡をめぐる、秀吉の町づくりの痕跡をたどります。道路の起伏が当時の想像をかき立てます。

- 史1** 北区紫竹上堀川町・堀川町(加茂川中学校前) 御土居の北東角の屈曲部分にあたり。堀川通に分断されていますが、通りの東側と西側に土塁を確認することができます。
- 史2** 北北大宮土居町(玄塚下) 保存状態が最も良く、約250mにわたって御土居が現存しています。フェンスで囲われており外側からしか見学できませんが、堀と土塁の構造がよくわかる御土居です。
- 史3** 北区鷹峯旧土居町2(長坂口) 御土居の北西角に当たる部分です。「お土居餅」で有名な向かいの光悦堂さんに鍵を借りて中へ入ることができます。
- 史4** 北区鷹峯旧土居町3(御土居史跡公園) 公園として整備された御土居。紙屋川左岸の段丘を利用して造られた土塁の頂部まで登ることができ、その高さを体感できます。
- 史5** 北区紫野西土居町 住宅地の一角にわずかに土塁が残ります。西土居町という地名にも御土居の名残を感じます。
- 史6** 北区平野鳥居前町 南北道路の東に整形されて残り、芝生が植えられています。周辺の御土居から出土した石仏が祀られています。
- 史9** 上京区馬喰町(北野天満宮境内) 境内西側に残る御土居の頂部には見晴らし台が設けられ、土塁構築の際に植えられたとされるケヤキの大きな木があります。有料区域で年に2回程度公開されます。



- Iコース
- IIコース
- IIIコース
- 御土居 体感ポイント
- 京の七口
- 御土居ライン
- 史跡 御土居(エリア)
- 史1
- 1
- 桜の名所
- 梅の名所
- もみじの名所
- 警察
- トイレ